

## 1. はじめに

「看護という職業は、医者よりもはるかに古く、はるかにしっかりとした基盤の上に立っている。医者が治せる患者は少ない。しかし看護できない患者はいない。息を引き取るまで、看護だけができるのだ」\*

この言葉に出会った当初「看護の独自性を代弁してくれた」と私は嬉々とした表情であったと振り返ります。臨床での看護師と医師との関係は従属的な部分があることは否めません。指示を受けることが業務遂行上どうしても必要だからです。チーム医療であるはずなのに医師との関係が対等ではないことに不満さえ覚えていた当時の私は卑屈な思いで業務に当たっていました。ですからこの言葉を聞いた時、自分の不満を払拭してくれる言葉に出会えたような錯覚に陥りました。この言葉は看護の独自性を言い表していることは確かです。ところがそれに止まりません。

当時私は「看護できない患者はいない」にだけ目が奪われ、最後の一節にまで気が回っていませんでした。「息を引き取るまで、看護だけはできる」、それは「看取りにおいて看護師が存在することは、看護師にできる唯一の役割を遂行するため」ということを言い表しています。では看取りに際し看護師に求められる役割とは何な

# シリーズ『看る』 ということ

～看護師の私は何をする人ぞ～

## 第10回 「看取る」について考える —「私はもう死ぬのかしら」 という言葉の前にして—



株式会社N・フィールド  
居宅事業本部 教育専任室  
精神看護専門看護師

中村 創氏

のでしよう。本稿は「看取り」における看護師の役割について考えます。考えるに当たり、私が看取りに立ち会わせていただいた方の中から二人の女性とのエピソードをご紹介します。

## 2. 「私はもう死ぬのかしら」を前にして

その日は厚い雲が太陽を遮り気

ん、告知はされており麻薬による疼痛緩和がなされている状況でした。圧迫により呼吸が苦しくなる前に腹水を抜くなどの対応もしていました。いつものように椅子に座った瞬間、「私はもう死ぬのかしら」との言葉がありました。不意打ちでした。私は反射的に言葉を発しようとする自分の衝動を抑え、しばらく沈黙しました。彼女の眼はしっかりと私を見つめています。部屋には私と彼女しかいません。10秒ほど経ったでしょうか、意を決した私は「そう、ですね」と一言返しました。否定することも話を逸らすことも私はしませんでした。「するべきではない」と思ったからです。

彼女に「賛同してほしい」という気持ちがあったという確信はありませんでした。辛さを軽減してほしい、または圧倒的な孤独に寄り添ってほしいというニーズを感じたわけでもありませんでした。あったのは「ごく自然に出た言葉なのだろう」という淡い推察だけでした。どういう意図であったかも分かりませんでした。確定していることはその言葉が私に向かって発せられたものということだけです。

私にはそのことを聴き届ける義務があると直感的に感じました。ですから「私が聴きます。受け止めます」という意思表示をするためにそのように答えました。そう

答えて何が起こったわけでもありませんでした。ただ一言「そうよね」という答えが返ってきました。彼女が泣き崩れる、大声で怒りを表出する、「もう出て行って」と拒否をされることも覚悟していたのですが、そのどれも該当しませんでした。あったのは長い沈黙でした。病院は無情な場所でもありません。この沈黙を破る理由は結局「すみません次があります」という私の無機質な答えでした。そんな私に彼女は「いえ、ありがとうございます」と返してくれました。彼女はその後半月後に息を引き取りました。

### 3. 最期の嗜好品

その女性は長い間糖尿病を患っており、院内ではカロリー制限が課せられていました。アルツハイマー型認知症が悪化し、自宅での独居生活が困難となつての入院でした。愛想よく笑う方で、時々隠れて飴を食べては注意されるような、けれどどうしても憎めない80代前半の女性でした。

施設の空気が出ず入院後半年が過ぎていました。その頃から夕方

した。状況を見ながら経口摂取を試みていたのですが、回を重ねるごとに食物残渣が口腔内に目立つようになっていきました。高熱が続き、体力が落ちていくのがはっきりわかりました。

その日は娘さん夫婦とお孫さんもういらしての面会でした。深々と雪が降る午前中でした。すでに残された時間が少なくなっていることは娘さんも覚悟していました。私は長い間、高熱のためお風呂に入れていなかったことを思い出し、娘さんにドライシャンプーを提案しました。「もしよろしかったらシャンプーを掛けた後、櫛を通してあげてくれませんか」という私の提案におおずと「よろしいのでしょうか」と答えられたので、「私も一緒にさせていただきますから」とお伝えしました。

不安を帯びた空気の張りが少し和らいだのを感じ、私はシャンプーの準備をしました。ドライシャンプーを髪になじませブラッシングをすると、汗臭かった頭からシャンプーのさっぱりした香りが漂いました。「ばあちゃん、どう？気持ちいい？」。答えはありませんでした。娘さんは話し続けました。シャンプーが終わったのち私は「甘いもの好きでしたから、よかったらガムシロップをお口に含んでもらうのはいかがでしょう？」と続けました。娘さんが彼女の口に運んだ少量のガムシ

ロップは彼女が口にした最期の嗜好品となりました。日をまたがずお別れとなりました。

### 4. 助死師という役割

「誰かのためによきものを願う、それが看護です。」<sup>※2</sup>この言葉は終末期医療の普及に尽力した看護師でありシスターである寺本松野の言葉です。看護は常に相手に対しよきものを願います。その姿勢は臨終に際しても変わりません。むしろ臨終に近づけば近づくほど「願う」場面が多くなります。そしていよいよその日には「願うことしかできない」と言わなければならないでしょう。看護師の看取りにおける役割はこの「よきものを願う」に尽きるのです。

そして看護の領域において「助産師」が存在するのであれば、これまで立ち会わせていただいた看取りの経験から「助死師<sup>注</sup>」たる役割を看護師が自覚するべきで

はないかと感じています。「死を助ける」ということかどのような役割を持つものなのか、拙い実践と記述ではありますが上記の場面からお感じいただけると幸いです。

「よきものであってほしい」と願い、私は発せられた言葉に耳を傾けました。最期の時間を保清と嗜好品の提供という形でご家族と共有させいただきました。受動と能動、態度こそ違いますが、私は同じことをしたと振り返っています。「死というのは異常が起こったから死ぬのではなくて、自然の流れの行きついたところで起こるのであって、医療だけが囲い込む領域ではない」<sup>※3</sup>と考えた時、自然な流れを助ける、妨げない看取りを私たちは心掛けるべきではないでしょうか。そのためにベッドサイドに赴き静かに耳を傾けることをお勧めいたします。

注)「助産師がいるように、人生の旅立ちのとき、そばにいて援助し てくれる助死師の必要だ」という筆者が過去に出会った造語

#### 参考文献

- ※1 中井久夫、山口直彦、(2004) 看護のための精神医学 第2版 (p.2) 医学書院
- ※2 寺本松野、(2001) 看護は祈り 寺本松野 ことは集 (p.52) 日本看護協会出版
- ※3 鷲田清一、(2001) へ弱さのちから (p.15) 講談社

